

エフタの誓いから 主への祈りを考える

士師記11章29～40節
2021年9月19日
松田 基子 師

私たちは、イエス・キリストの十字架の贖いによる御救いを受けた事によって、神様との関係が、イエス様を介して、

「天の御父様」

と呼ぶ事が出来るようになりました。しかし私たちはその恵みの重さを知ろうともせず、いとも簡単に、神様に対して、馴れ馴れしく、自分の願いを祈り求めているのではないのでしょうか。

「天のお父様・・・ああしてください。

こうして下さい・・・。」

と自分の思い、願いが実現することばかりを、祈り求めているのではないのでしょうか。

祈りとは、そう言うものでしょうか。今朝は、エフタの、神様への誓いから、**祈りの本質**を考えて参りましょう。エフタは、先の、ギデオンの死から、その子アビメレクの悪政、3年が続き、その後、小士師2人が裁いた45年を経て、イスラエルが、またもや偶像礼拝に浸り、そのために18年間外敵に悩まされた結果、立ちあがった士師です。士師記の10章6節を見ますと、

「イスラエルの人々は、またも主の目に悪とされることを行い、パールやアシュトレト、アラムの神々、シドンの神々、モアブの神々、アンモン人の神々、ペリシテ人の神々に仕えた。彼らは主を捨て、主に仕えなかった。」

とあります。

イスラエル人は、神様を見上げないで、人間の本能に訴える、目の前の享楽に惹かれ、我欲を満たしてくれると言う偶像に、それも多ければ多いほど、多くのものを得られるに違いないと、周辺の国々の神々を皆拝みました。真実と正義を尽くされる神様が、この様なイスラエルの背信を嘆き、怒られない筈が在りません。神様は周辺国で力を得てきた、ペリシテ人と、アンモン人が、イスラエルを侵略する事を許されました。

イスラエルは苦しくなると、主なる神様に助けを求めました。神様はイスラエルの民を出エジプト以来、助け続けて来られたにも拘わらず、繰り返し偶像に走る、イスラエル人に対して、10章14節で、

「あなたたちの選んだ神々のもとに行って、助けを求めて叫ぶが良い。苦境に立たされた時には、その神々が救ってくれよう。」

と突き放されました。

すると、イスラエルは、自分達の罪を認めました。そして16節を見ますと、

「彼らが異国の神々を自分たちの中から一掃し、主に仕えるようになったので、主はイスラエルの苦しみが耐えられなくなった。」

と記されています。つまり、生ける真の神様は、愛なる神様故に、イスラエルの惨状を見るに忍びなくなられ、知らないふりをされることが出来なくなったと言う訳です。その時のイスラエルの状況はといいますと、アンモンの人々が、ギレアドの一番東に陣を敷いて、ギレアドを攻略しようとしていました。

ギレアドはイスラエルの12部族の内、ルベン族とガド族に与えられた土地ですが、南にモアブ、東にアンモン、北にバシヤンに囲まれていて、他国の侵略に一番晒された所です。ギレアドのイスラエル人は、アンモンに立ち向かうために、ミツパに集まりましたが、アンモン人に立ち向かえるような勇者はいませんでした。

彼らは頭を求めていました。その彼らに一人の人物が浮かび上がりました。それがエフタです。エフタはどんな人物だったかと言いますと、地名と同じギレアドの名を持つ人の子供でしたが、正妻から生まれた子供ではありませんでした。そのために、エフタが成長すると、他の兄弟達は、

「あなたは、よその女の生んだ子だから、わたしたちの父の家には、あなたが受け継ぐものはない。」

と言って、追い出されてしまいました。

そこで エフタは、北上して、東ヨルダンの都市国家であるトブに辿り着き、身を落ち着けました。彼は、豪傑だったのでしょう。エフタの様に居場所が無くてあての無い人々、11章3節には、

「ならず者」

と記されていますが、そう言う人々がエフタの許に集まってきました。エフタは彼らを集めて何をしたのでしょうか。砂漠や荒れ野に行く商人達を襲って、略奪をして生活をしたのです。今日のような、善悪の感覚はありませんでした。強い者が力で制していた時代です。あのダビデがサウル王から命を狙われて、逃れていた時は、部下を引き連れて、他民族の略奪をして、部下を養いました。略奪が強者の通念として、まかり通っていた時代の話です。

さて、ギレアドの長老達は、

「アンモン人と戦えるのはあの、エフタしかいない。」

と言う事になり、彼らはトブの地に、エフタを迎えに行きました。11章6節で、

「彼らはエフタに言った。

『帰って来て下さい。わたしたちの指揮官になっていただければ、わたしたちもアンモンの人々と戦えます。』」

と頼みました。エフタは虫の良い長老達に、

「あなたたちはわたしをのけ者にし、父の家から追い出したではありませんか。」

と言いつ返しています。岩波訳によりますと、

「エフタ追放には、長老達も関わっていた」

のです。エフタの追放は、兄弟達の策略とは言え、町の門での、正当な裁判に掛けられ、長老達の裁可によって、追放は決定したと思われれます。エフタは彼らに、

「困ったことになったからと言って、今ごろなぜわたしのところにくるのですか。」

と問い正しました。長老達はエフタを宥め、8節に、

「わたしたちと共に来て、アンモン人と戦ってください。あなたにわたしたちギレアド全住民の、頭になっていただきます。」

と頼みました。

エフタにとっては、兄弟を見返す好条件です。エフタはギレアドの頭になると言う条件を長老達に確認して、11節で、

「エフタはギレアドの長老達と同行した。民は彼を自分達の頭とし、指揮官として立てた。エフタは、ミツパで、主の御前に出て、自分が言った言葉をことごとく繰り返した。」

とあります。ミツパと言うのは、『見張る』

と言う意味があり、聖所を意味する言葉です。

ギレアドだけでなく、他にもミツパが何箇所かあります。エフタは、主なる神様の前で、ギレアドの頭になる事を誓わせました。

早速、エフタは、ギレアドの頭として、アンモンの王に使者を送り、12節で、

「あなたはわたしと何のかかわりがあって、わたしの国に戦いを仕掛けようと向かって来るのか。」

と言わせました。するとアンモンの王は、エフタの使者に答えました。

「イスラエルがエジプトから上って来た時、アルノンからヤボク、ヨルダンまでのわが国土を奪ったからだ。今、それを平和に返還せよ。」

という訳です。昔から、どの民族も、力を付けて来ますと、領土の拡大を図るのが世の常です。アンモンの歴史を溯りますと、ギレアドの地域といえますのは、その昔、アンモン人が住んでいました。その所をアモリ人が奪い取ったのです。

一方、モーセに率いられて、出エジプトしたイスラエルは、荒れ野放浪、40年を経て、愈々ヨルダン川を目指した時、エドムも、モアブも領内の通過を拒否しましたから、イスラエルはその境界線まで、迂回したのですが、次ぎにモアブの北に位置するアモリ人の王、シホンに、国の通過を願い出ました。ところが、彼らは、戦いを仕掛けて来たのです。その結果、神様が、シホンに勝たせて下さいました。そのようにして、アモリ人の王シホンの領土は、イスラエルのものとなりました。そこに、ルベン族とガド族、マナセの半部族が住み住み着いたのです。その土地をアンモン人は、

『元々、自分達の土地だったのだから、

返還せよ。さもなくば、戦って取り返す。』
という訳です。

エフタは唯の豪傑ではありませんでした。彼はその事を、理路整然と説明しています。そして、結論として、11章24節で、

「あなたは、あなたの神ケモシユが得させてくれた所を得、わたしたちは、わたしたちの神、主が与えてくださった所をすべて得たのではなかったか。」

と言っています。当時は、国家神の力で領地を得ると言う考えでした。しかし、そのような説得に聴く耳を持たないアンモン人は、戦うことしか、考えていませんでした。

エフタはアンモン人の戦いに備える以外にありません。神様はエフタをお用いになるために、彼に主の霊を注がれました。彼はヨルダン川の東側のイスラエルの領地、ルベン族、ガド族が住むギレアドの地とその北に住むマナセ族を行き巡り、兵を集めて回りました。そして中央聖所のあるミツパに結集して、アンモンに立ち向かう事にしました。神様の前に、身を正し、神様の力を得て、出陣すると言うことは、望ましいことです。エフタはその事を十分承知して、ミツパから、出陣しようとしたのですが、彼はここで、30節に、

「エフタは主に誓いを立てて言った。

『もしあなたが、アンモン人をわたしの手に渡して下さるのなら、わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、私の家の戸口から私を迎えに出て来る者を、主のものと致します。わたしはその者を焼き尽くす献げ物と致します。』

と誓いました。

エフタは、何が何でも、アンモン人に勝たねば成りませんでした。しかし彼がどんなに豪傑であっても、略奪隊の頭です。今までの相手は隊商であり、護衛が付いていたとしても、力で負けることはありませんでした。しかし、民族と民族の戦いとなると、王は戦術を学び、兵は訓練されて居ます。闇雲に当たって行って、勝てる

相手ではありません。そこに、エフタは、神様の助け無しには、この戦いに勝利する事は出来ない事を十分に承知していました。しかし、彼は、モーセのように、神様の尊厳を思い、神様の全能に委ね、神様の栄光が現れることに、自分を無にして捧げるまでの信仰は在りませんでした。

エフタは何と、神様と取引をしたのです。

「もしアンモン人をわたしの手に渡して下さるなら、」

と言っています。仮定の言葉には、神様への全信頼と、心からの服従がありません。エフタはモーセの故事を、あれほど正確に言えたのに、律法は忘れたのでしょうか。

レビ記18章21節には、

「自分の子を一人たりとも火の中を通らせてモレク神にささげ、あなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。」

とあり、申命記12章31節には、

「あなたの神、主に対しては彼らと同じことをしてはならない。彼らは主がいとわれ、憎まれるあらゆることを神々に行い、その息子、娘さえも火に投じて神々にささげたのである。」

とあります。

主なる神様は、人身御供を厳しく禁止しておられます。エフタは神様が、何を一番お慶びになるか、その事に心の耳を傾ける事無く、自分の思いで、主なる神様も他国の神同様、人間の命を一番喜ばれるに違いないと思い込んでいました。サムエル記上の15章22節で、サムエルはサウルに言っています。

「主が喜ばれるのは、焼き尽くす献げ物やいけにえであろうか、むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。見よ、聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる。」

とあります。

神様を愛し敬うと言うことは、神様の御心を鎮まらせて聞き、従うことです。エフタは神様の助けを求めましたが、自分の思いでアンモン人との

戦いを戦いました。結果は神様の憐れみによって、アンモン人を打ち破り、20の町を征服しました。エフタは意気揚々として、ミツパにある自分の家に帰って来ました。果たして誰が真っ先にエフタを迎えたのでしょうか。何とそれはたった一人のわが子、愛する一人娘が、喜びに溢れ、鼓を打ち鳴らして、踊りながら迎えに出て来たのです。エフタの心は嘆きに一変しました。彼は悲しみを現して、衣を引き裂き、

「ああ、わたしの娘よ。お前が私を打ちのめし、お前が私を苦しめるものになるとは。わたしは主の御前で口を開いてしまった。

取り返しが付かない。」

と嘆きました。エフタは自分の独りよがり気がつききました。

娘は健気に、36節で、

「父上、あなたは主の御前で口を開かれました。どうか、わたしを、その口でおっしゃった通りにしてください。主はあなたに、あなたの敵アンモン人に対して復讐させてくださったのですから。」

と答えました。2ヶ月間の有余を貰い、友と過ごし、死への備えをしたのでした。神様は何もお答えになっていません。と言うより、エフタは唯自分を悔いるばかりで、神様に聴く事をしなかったのです。

人間は、エフタだけでなく、神様に少しも聴こうとはしません。自分の思いを神様に押し付け続けて来ました。

『神様の御心は、そうではない』

と言うことを、世界に知らせるために、神様の御心そのものであられる、御子イエス様は、人となってこの世に生まれ、神様の御心をお示しになりました。イエス様は、神様の御心を悟る為に、いつも祈られました。それは御心を聞かれたと言う事です。イエス様の祈りの典型は、あの、ゲツセマネの祈りにあります。

マタイ福音書、26章39節に、

「少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。

『父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。』

とあります。

神様への祈りとは、勿論、私たちの必要、願いを、神様に訴えてよいのです。しかし、それは、神様に押しつけるのではなくて、神様の御心こそ最善と信じて、信頼して、御心のままになさって下さいと、お委ねするのが祈りです。

わたしたちの人生の目的は何でしょうか。神様の御心に従い、神様の栄光を現すことです。そのために、わたしたし達は神様の前に鎮まって御心を聴くことです。祈りとは神様の御心を聴くことであり、全信頼して、従うことです。私たちは先ず、祈りの生活をそこから踏み出して行こうではありませんか。

お祈りを致します。

愛と憐れみに富んでおられる天の父なる神様

私たちに祈る事を許し、祈りをお聴き下さる恵みを感謝致します。しかし、私たちの祈りは、自分の必要や願いをあなたに押しつけるばかりで、御心を静かに聴く事をしないでいます。

この身勝手な罪をお許し下さい。どうか主の前に鎮まって、御聖霊の内住を待ち、主の御心を聴く祈りになりますように、御心を悟り、聞き従い、主の栄光を現すものと成らせてください。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。